

I. 基礎調査

1. 漁獲実態調査

(橋本佳樹)

セタシジミ漁業の現況と資源の動向を把握し、資源管理および増殖方法の検討のための基礎資料とする。

方 法

1992年1月から12月まで、5～7月を除き、県内の貝採捕漁業者に、漁獲の現況調査と

水 揚 日	___月 ___日
桁網の大きさ	ヨコ___cm×タカサ___cm
ツメの有無	有 無
操 業 時 間	___時 ___分 ~ ___時 ___分
一回あたり曳網時間	時間 分

	個 数	重量(kg)	金額(円)
シ ジ ミ			
マルドブ			
タテボシ			
イケチョウガイ			
タニシ			
そ の 他			
今日の総水揚高			

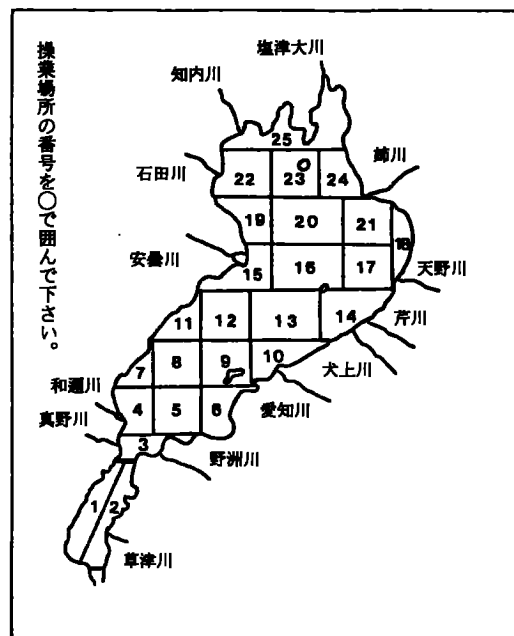


図 I-1 漁獲日誌.

して、図 I-1 に示した漁獲日誌への記載を依頼した。

依頼した漁業者（以下、標本船という）は、堅田漁業協同組合員 4 名、中主漁業協同組合員 1 名、彦根市松原漁業協同組合員 3 名、沖島漁業協同組合員 1 名の計 9 名であった。

漁獲の方法は、すべて手繰第3種漁業（以下、貝曳網という）によるものである。

結果および考察

セタシジミの漁獲状況 1992年1月から12月までの標本船の出漁状況および漁獲量を図 I-2、表 I-1 に示した。

延べ出漁日数の多い水域は、いずれも現在の主要漁場を含む水域で、彦根市松原地先を含む№14が420日と最も多く、ついで彦根市石寺、新海地先を含む№10の119日、近江八幡

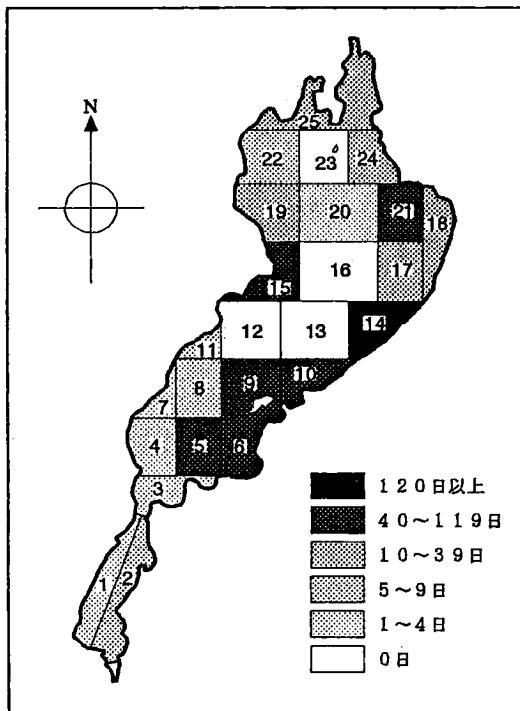


図 I - 2 1992年1～12月のセタジミ出漁状況. 図中の数字は、水域番号を示す.

市長命寺地先を含む№6の85日、近江八幡市沖島周辺を含む№9の71日であった。1991年の調査でも出漁日数が最も多かったのはこれらの水域であり、この4水域で全出漁日数の70%を占めた。

漁獲量では、№14が12,781kgと最も多く、ついで№10、№6がそれぞれ10,480kg、10,319kgであった。

年間の延べ出漁日数が10日以上あった水域について、過去4年間の水域別のセタジミのCPUE（出漁日数あたりの漁獲量）を表I-2に、水域別のCPUEの変動傾向を図I-3に示した。

主要漁場である№6、9、10および14では、若干の増減はあるものの、CPUEはほぼ一定しており、資源と漁獲とが平衡した状態であることが示唆された。№14のCPUEが30.4～37.9と他の3水域（44.3～121.4）にくらべて低いのは、

表 I - 1 1992年1～12月の水域別セタジミ水揚高

水 域	延出漁日数	漁 獲 量 (kg)	生 産 額 (円)
1	1	12	3,600
2	9	1,060	239,000
3	9	340	72,000
4	3	540	108,000
5	64	2,035	693,650
6	85	10,319	2,566,450
7	4	487	102,700
8	1	100	20,000
9	71	8,125	1,934,540
10	119	10,479.5	3,022,340
11	5	860	244,500
14	420	12,781	4,235,815
15	40	6,667	1,816,410
17	15	1,643	425,140
18	16	2,514	636,140
19	18	3,494	810,450
20	1	55	19,250
21	64	11,169	2,597,930
22	5	521	140,300
24	23	4,068	1,113,400
25	27	7,911	1,757,700
合 計	994	85,180.5	22,559,315

表 I - 2 1989～1992年のセタジミ水域別 CPUE

*1 水 域	*2 延出漁日数	漁 獲 量 (kg)	CPUE
5	66	2,451	37.1
	42	1,365	32.5
	75	2,542	33.9
	64	2,035	31.8
6	181	8,024	44.3
	108	6,160	57.0
	93	9,330	100.3
	85	10,319	121.4
9	156	10,158	65.1
	205	17,233	84.1
	189	13,394	70.9
	71	8,125	114.4
10	88	5,971	68.2
	139	8,260	59.4
	83	6,415	77.3
	119	10,480	88.1
14	321	10,113	31.5
	360	13,651	37.9
	321	10,113	31.9
	420	12,781	30.4
15	44	6,473	147.1
	21	2,369	112.8
	44	6,473	147.1
	40	6,667	166.7
17	28	4,459	159.3
	34	4,984	146.6
	28	4,459	159.3
	15	1,643	109.5
21	34	3,333	98.0
	34	4,838	142.3
	19	2,961	155.8
	64	11,169	174.5
25	38	7,524	198.0
	24	4,288	178.7
	38	7,524	198.0
	27	7,911	293.0

各水域それぞれ上段から1989、1990、1991および1992年の結果を示す。

*1 年間の延べ出漁日数が4年間通して10日以上あった水域。

*2 調査した漁業者数 9～10人。

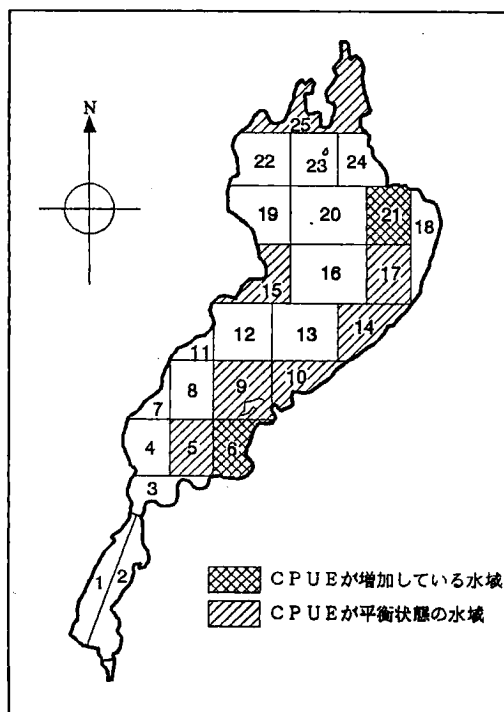


図 I-3 年間の延べ出漁日数が10日以上漁場におけるセタジミ CPUEの変動傾向。

この水域で主に操業している松原漁業協同組合が受注漁獲を行っており、必要以上の漁獲をしないためである。No 6では、出漁日数が減少しているにもかかわらず漁獲量はほぼ一定で、CPUEは1989年の44.3から1992年の121.4へと増加傾向を示しており、資源が増加している可能性がある。また、No 21では、1991年から1992年にかけて操業日数が19日から64日へと3倍になったにもかかわらず、CPUEは155.8から174.5へと増加しており、資源量の多さを示唆しているが、過度の漁獲が懸念される。

なお、1989年から1991年までは延べ出漁日数が10日以上あったNo 2とNo 11は、1992年にはそれぞれ9日、5日と減少した。No 2はCPUEが減少傾向（1991年：156.4→1992年：117.8）であり、No 11は増加傾向（1991年：139.9→1992年：172.0）であるものの、漁場面積が狭いことから漁獲強度の強さがうかがわれ、両水域とも資源の

枯渇が懸念される。

つぎに、標本船の組合別の月別漁獲量と生産額を表 I-3に示した（繁殖保護のための禁漁期間である5～7月は除く）。

年間の総漁獲量は約85 t、総生産額は約2,300万円であった。前年より漁獲量では8 t増加しているが、生産額はほぼ同じであった。県下の貝採捕漁業の中心となっている堅田漁業協同組合の標本船では、約67 tの漁獲で約1,670万円の生産額をあげている。これは、標本船の総漁獲量の79%、総生産額の74%を占めている。他の組合が地先型の漁業を営んでいるのに対して、当組合は琵琶湖一円で操業しており、年間の漁獲量、生産額を左右する位置にある。

標本船の総漁獲量と総生産額の月変化を図 I-4に示した。漁獲量、生産額ともに最も多い月は12月で、漁獲量は12,541.5 kg（標本船1隻平均1,393.5 kg）、生産額は3,107,920円（標本船1隻平均345,324円）となった。例年は3月にもピークが見られ

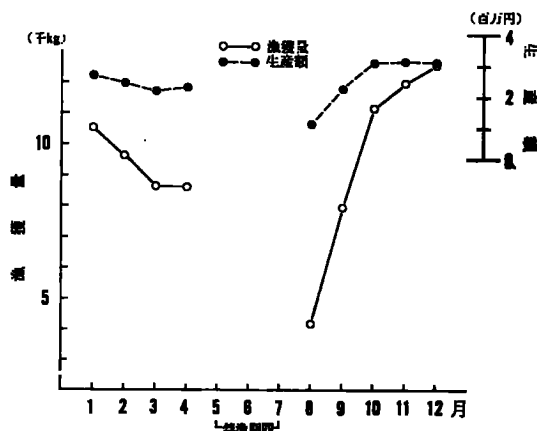


図 I-4 1992年1～12月のセタジミ漁獲量と生産額の推移。

表 I - 3 1992年1～12月の漁業協同組合別セタシジミ水揚高と単価

組 合	調査した 漁業者数	1 月		2 月		3 月		4 月		8 月	
		漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)
堅 田	4人	7,935	1,923,100	7,333	1,741,400	7,633	1,867,300	7,116	1,792,200	3,085	773,800
中 主	1人	—	—	—	—	—	—	406	121,800	—	—
松 原	3人	1,424	498,400	1,338	468,300	979	342,650	1,101	385,350	1,093	381,260
沖 島	1人	1,182	295,280	946	274,360	—	—	—	—	—	—
計	9人	10,541	2,716,780	9,617	2,484,060	8,642	2,209,950	8,623	2,299,350	4,178	1,155,060

9月		10月		11月		12月		合 計		単 価 円/(kg)
漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)	漁獲量 (kg)	生産額 (円)	
6,191	1,704,140	9,356	2,503,960	9,028	2,195,090	9,712	2,182,120	67,419	16,683,110	150～438
458	160,300	452	158,200	375	130,250	553	193,550	2,244	764,100	300～350
1,294	452,800	1,102	384,905	1,239	433,650	986	345,100	10,556	3,692,415	305～359
—	—	225	67,500	1,318	395,400	1,290.5	387,150	4,961.5	1,419,690	198～363
7,943	2,317,240	11,135	3,114,565	11,960	3,154,390	12,541.5	3,107,920	85,180.5	22,559,315	平均 305

るが、今回は見られなかった。これは、標本船中4隻にこの時期漁獲がなかったためである。

その他の貝類の漁獲状況 セタシジミ以外に漁獲される貝類について、全標本船の1992年1月から12月までの出漁状況および漁獲量を表I-4~7、図I-5~8に示した。

タテボシは、前年より延べ出漁日数は49日減少し、総漁獲量も約1,410kg減少した。また、マルドブガイ、タニシも昨年度より延べ出漁日数、総漁獲量ともに半減している。これは、今回南湖を主な漁場としている漁業者（現在の南湖は、マルドブガイ、タニシ等が主漁獲物で、セタシジミは少ない）を標本船からはずしたためであり、資源量の減少を示すものではない。淡水真珠の母貝として利用されるイケチョウガイはほとんど漁獲されず、通常の貝曳網での混獲もほとんどない。

表I-4 1992年1~12月の水域別タテボシ水揚げ高

水 域	延出漁日数	漁 獲 量 (kg)	生 産 額 (円)
1	1	187	65,450
2	3	140	39,200
3	2	70	19,600
9	22	760	202,500
10	62	3,322.4	867,558
14	15	132.2	43,773
15	1	10	2,800
18	6	246	60,260
21	2	44	9,680
22	2	22	6,160
25	1	10	2,800
合 計	117	4,949.6	1,319,781

表I-5 1992年1~12月の水域別マルドブガイ水揚げ高

水 域	延出漁日数	漁 獲 量 (kg)	生 産 額 (円)
1	10	1,628	470,640
2	13	1,658	425,760
5	1	25	7,500
14	2	9.2	3,220
21	2	200	40,000
24	4	400	80,000
合 計	32	3,920.2	1,027,120

表I-6 1992年1~12月の水域別イケチョウガイ水揚げ高

水 域	延出漁日数	漁 獲 量 (個)	生 産 額 (円)
14	1	7	2,450
合 計	1	7	2,450

表I-7 1992年1~12月の水域別タニシ水揚げ高

水 域	延出漁日数	漁 獲 量 (kg)	生 産 額 (円)
10	5	16	24,000
15	5	31	46,500
19	1	13.5	20,250
22	1	13.5	20,250
25	1	27	40,500
合 計	13	101	151,500

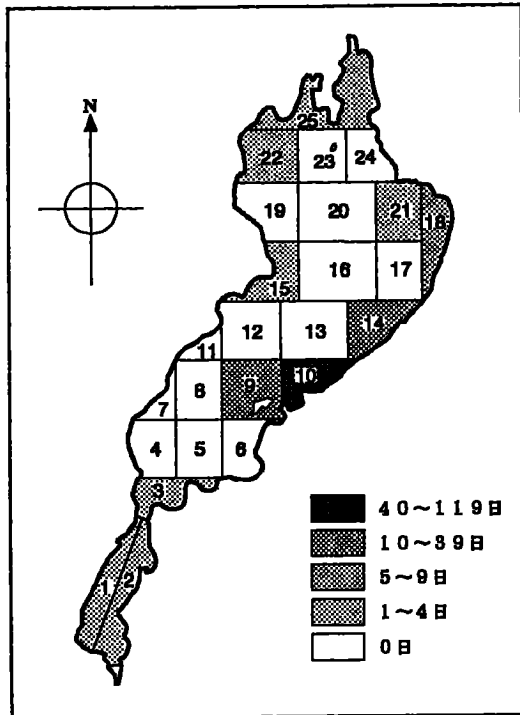


図 I - 5 1992年1~12月のタテボシ出漁状況. 図中の数字は、水域番号を示す.

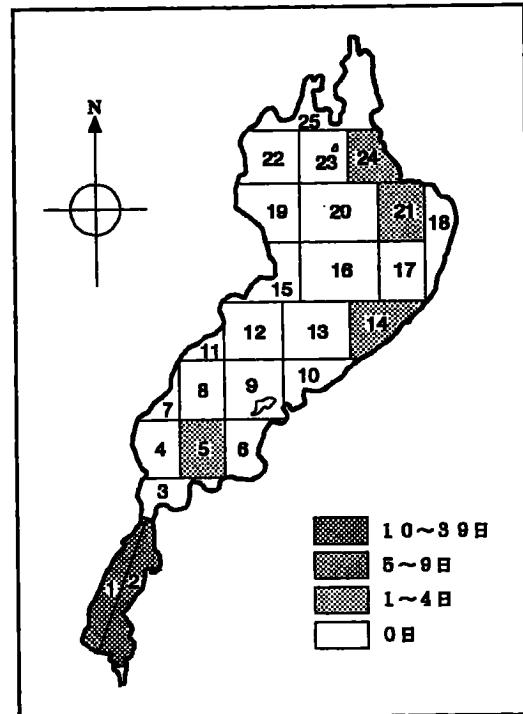


図 I - 6 1992年1~12月のマルドブガイ出漁状況. 図中の数字は、水域番号を示す.

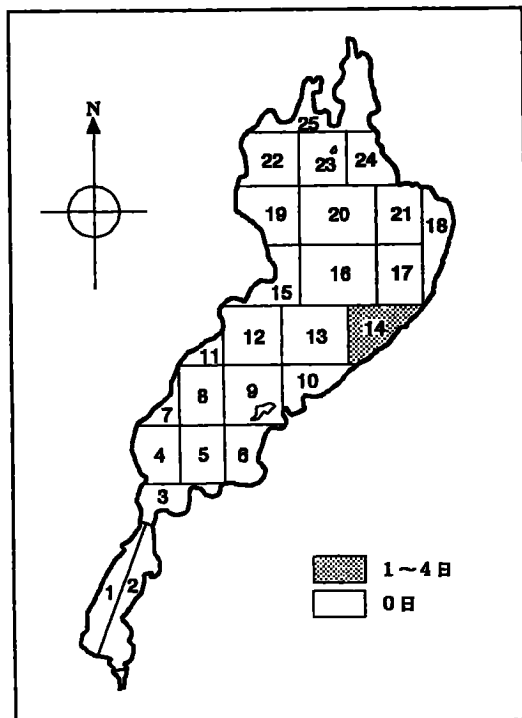


図 I - 7 1992年1~12月のイケチョウガイ出漁状況. 図中の数字は、水域番号を示す.

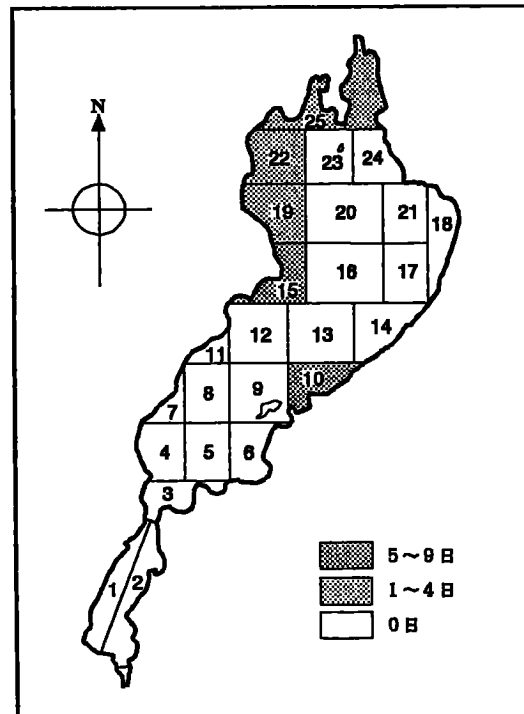


図 I - 8 1992年1~12月のタニシ出漁状況. 図中の数字は、水域番号を示す.